調査コラム～史料調査の現場から　第 31 回

新発見・菖蒲山萬寿寺本堂を飾る「六目結紋」の釘隠

（松江市松江城・史料調査課副主任行政専門員/稲田信/2022 年 11 月 15 日記）

【写真 1】六目結の紋が確認できる釘隠

2022 年 10 月 13 日の昼過ぎだっただろうか、隣席の西尾克己さんから一枚の写真を見せられ、驚いた。斜め下から見上げた横木の中央に、楕円形で六目結の紋が確認できる金属製品（釘隠）が打ち付けられていた【写真 1】。細かい細工と「六目結紋」（「堀尾目結紋」とも）が施された楕円形の金属製品に、西尾さんも私も、かつて松江城天守に展示され、現在松江歴史館で収蔵されている「伝三之丸御広間釘隠」を直ぐに連想したのである。

写真のいきさつを聞くと、数日前に松江城・史料調査課史料調査係の小山係長と村角歴史史料専門調査員が萬寿寺の絵画調査（陶山勝寂作品）に訪れた折、小山係長が堀尾家家紋「六目結紋」に気づき二人で写真を撮ったということで、西尾さんが堀尾氏関連の調査コラム（第 27 回）を紹介されたことから、そういえばこんな写真が…と村角調査員より見せられた、ということだった。村角調査員に本堂内の様子を聞くと、本堂内には同様の釘隠がいくつも打ち付けられていたようで、他の写真からも楕円形の釘隠が複数確認できた

（【写真 2】など）。萬寿寺は嘉永元年（1848）に山門以外すべてを焼失し、現在の本堂はその後再建されたものであることも萬寿寺発行のリーフレットから分かった。

【写真 2】萬壽寺本堂内部

堀尾氏に関係する「伝三之丸御広間釘隠」の同等品が複数所在するという可能性自体に驚きつつも、仮に「六目結紋」の釘隠が複数所在するのであれば、焼失後の萬寿寺本堂再建の部材として、明治 8 年（1875）に解き払われたとされる三之丸御殿が利用された可能性があるのではないか？という恐ろしいような想定も頭をよぎった。萬寿寺本堂は長年多くの人の目に触れてきた場所でもあり、何らかの手掛かりがないかと、松江市内の文化財や松江城の伝来資料に詳しい岡崎雄二郎さんに聞いてみたがご存じない。大変な発見では、と西尾さんと私は傍目にも驚きを隠せずにいたが、村角調査員からは「間違っていたら恥ずかしいですよ」と、たしなめられていた。

10 月 14 日に別用で松江城・史料調査課においでになった大矢幸雄先生にも聞いてみた。大矢先生は檀家の一人として萬寿寺の歴史に詳しく、寺のリーフレット作成にも関わっておられたのである。釘隠については気に留めたこともなかったとのことだったが、ご住職や役員にご了解いただき、調査を進めようということになった。10 月 17 日には大矢先生と松江歴史館を訪れ、「伝三之丸御広間釘

隠」を新庄学芸員とともに実見し、形状や細かい細工の同一性から、写真に写る萬寿寺本堂の釘隠は「伝三之丸御広間釘隠」と同等品（同じ意匠で作成された製品）であると三人で確認することができた【写真 3】。

【写真 3】「伝三之丸御広間釘隠」松江歴史館蔵

10 月 18 日には御殿や武家の屋敷に詳しい和田嘉宥先生に建物調査のご了解を頂くとともに、この日萬寿寺を訪れた大矢先生から、本堂内に「六目結紋」の釘隠は 30 個近くあること、本堂横の書院内にも意匠が異なる釘隠が複数あることなどが伝えられてきた。

これらの経緯を経て、いよいよ萬寿寺に伺っての調査に入ることになった。

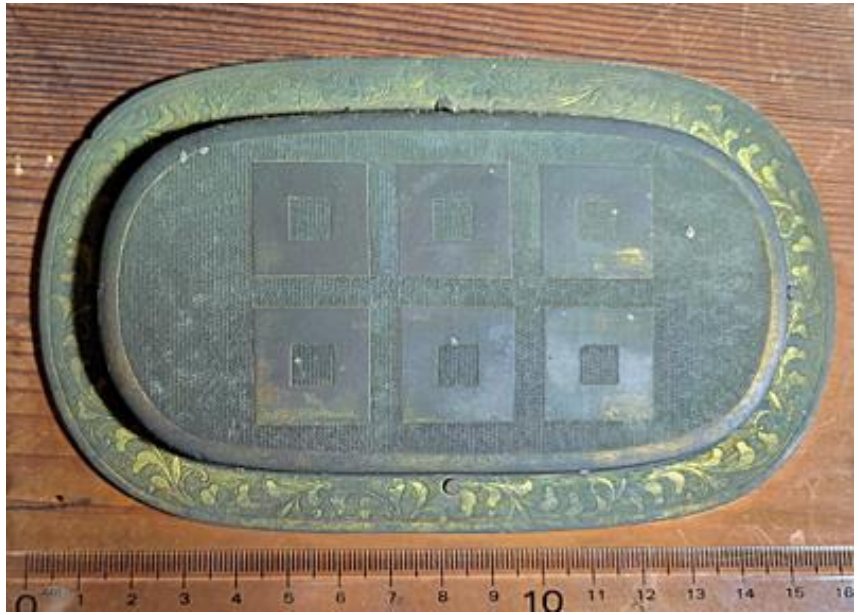
10 月 24 日、緊急調査班を組んだ大矢・西尾・村角・稲田の 4 名が萬寿寺に伺い、ご住職の全面的なご協力をいただき、本堂、書院を飾る釘隠の所在確認と撮影を行った。手順は、

1. ご住職から提供された萬寿寺平面図を用い 4 人揃って釘隠の所在場所を確認する
2. 平面図に意匠別に釘隠の通番号を付す
3. 番号順に釘隠を番号札・スケールとともに写した後に釘隠のみを撮影する

【写真 4】萬壽寺内での釘隠調査風景

とした。本堂内で確認した「六目結紋」の釘隠は 36 個を数えた。また、書院内では、「三つ並び輪違い紋」・「三輪違い紋」10 個、「右向き替り揚羽蝶紋」10 個の釘隠が確認された。「右向き替り揚羽蝶紋」の釘隠は書院の中でも格式の高い 2 部屋に飾られていたのだが、松江藩の家老職を代々勤めた神谷家の家紋が「右向き替り揚羽蝶紋」であることが後で分かり、この時点で、萬寿寺書院は、再建にあたり明治初年に神谷家の屋敷を移築した可能性があるのではないか？と思い始めた。

「萬寿寺本堂、書院の釘隠配置図」村角作図（PDF ファイル）参照



左【写真 5】萬寿寺本堂の六目結紋釘隠

右【写真 6】萬寿寺書院の右向き替り揚羽蝶紋釘隠

10 月 27 日、大矢・村角・稲田の 3 名が文献史料の所在確認と建物の撮影のために萬寿寺に再び出向いた。文献史料の所在調査では、「幕末から明治初年にかけての伽藍復興大事業」を記録した一括資料が見つかることを期待し、蔵、書院、書籍庫、納戸など、古記録がありそうな場所をご住職に案内していただいたが、残念ながら、伽藍復興に関する資料を見出すことはできなかった。ご住職には継続的な記録探索をお願いし、お寺を後にした。

11 月 8 日、和田嘉宥先生においでいただき建物調査に臨んだ。ご住職と萬寿寺役員に立ち会っていただき、調査班の大矢・西尾・村角・稲田の他、岡崎雄二郎さん、飯塚課長、小山係長、新庄学芸員にも参加いただいた。先ず、資料によりこれまでの経緯を説明し、次いで新庄学芸員に持参してもらった松江歴史館蔵「伝三之丸御広間釘隠」と本堂内「六目結紋」釘隠との比較を行い、参加者全員で同等品（同じ意匠で作成された製品）であると確認した。その後、全員で本堂、書院を飾る「六目結紋」、「三つ並び輪違い紋」、「三輪違い紋紋」、「右向き替り揚羽蝶紋」の釘隠を見てまわった。

和田先生は建物内部を丹念に調査され、文献史料や絵図、棟札など、決定的な根拠を欠く中ではあるが、「万寿寺の建物群（本堂・書院・茶室）は、釘隠の状況などから移築されてきたものかもしれない。書院は武家屋敷の書院と考えてもよいのかもしれない。」とのコメントをいただいた。萬寿寺の茶室については、『松江の茶室』（岡田孝男 1968、茶室研究会）に、「もと旧藩士の所有で、奥谷町にあったのを明治二三年頃、万寿寺三代前の住職が、求めて、寺の西北隅の崖下に移築したもので、茶室の縁側は、昔不昧公の野遊の折、立ち寄られた事があり、袴ぬぎの為に作ったものと伝える。」とあり、不昧由来の茶室を移築したものと伝えている。「旧藩士」「奥谷町」「不昧公の野遊の折、立ち寄られた」、という言葉からは、松江藩家老職を勤めた乙部家下（中）屋敷からの移築が想像された。

ところで、松江歴史館所蔵の「伝三之丸御広間釘隠」は、松江城天守大修理中の昭和 28 年（1953）4 月に旧藩士の末裔、畑定助氏より松江市に寄贈されたもので、三之丸御殿御広間からの伝来を記す次のような添状が付されていた（小山係長・新庄学芸員翻刻）。

> 此六ツ目釘隠ハ明治維新之際、三丸解売ト成、時之母君（歓峯〔岸カ〕院殿）被為歎、
> 一品為紀念保存御希望ニ付、其売手ニ乞テ是ヲ求、御広間辺ノ釘隠ヲ□
>
> 畑　間
>
> 子孫右之主意ヲ□□シ、永世保存アリタシ

また、18 世紀終わり頃に成立したとされる「雲陽秘事記」（御二代目綱隆公御代）（島根県立図書館本）には次のような興味深い記述が知られている（太字筆者）。

> 江戸定府の士に平賀内蔵人といふ者あり。壱人の娘有けるか、きりやう万人に勝れて其上女業何一つとして成らすといふ事なし。其上気立てもよく両親へ孝道を尽し朝夕神佛を信心して只家の武運長久を祈られけるが、ある夜の夢に所ハ何国共不知けれ共さしも廣大成殿中へ嫁入して行と見たり、其釘隠し皆六つ目なりと見給ふ。翌朝両親ニ告て此夢の様子委敷語られけれハ、内蔵人言れけるは、それは吉夢也、其上殿中の釘隠し六つ目といふハ当時の御家ニ六つめの紋所なし、御国の三ノ丸こそ堀尾家の普請にして寄懸六つ目也、何ニもせよ吉夢なり。と咄有之處に、御国より綱隆公の御奉公来り、其方娘御国御前と定られける由申来けれは、人々其吉夢の不思議を感しける。則吉透公の御母君養法院殿是也。綱隆公御他界の後ハ春日村真崎ト云所に御花園を開き、此所ニ一生御住居ありける。今松崎御茶屋是也摩利支天の社も則養法院殿の御建立也。

これによれば、松江松平家 2 代藩主綱隆の側室となる平賀内蔵人の娘（養法院）は、ある夜、“さしも廣大なる殿中へ嫁入して行と見たり、その釘隠し皆六つ目なりと見給ふ。”と、夢を見る。翌朝娘からこの話を聞いた内蔵人は“六つ目”に注目し、“御国の三ノ丸こそ堀尾家の普請にして、寄懸六つ目也”と答えている。

「雲陽秘事記」には直ちに史実とは認めがたい部分が多く含まれているが、伝本が数多く見られることから、秘事記と言いつつ実際にはよく読まれていたことがうかがえる。夢のお告げが正夢になるというこの物語も直ちに史実と捉えることはできないものの、「雲陽秘事記」が成立した頃には、三之丸の御殿に「寄懸六つ目」＝「六目結紋」の釘隠があることは広く知られていたのだろう。

萬寿寺本堂を訪れ、おびただしい「六目結紋」の釘隠を見ていると、平賀内蔵人の娘（養法院）が見たのはこのような景色だったのだろうかと、つい夢を見てしまいそうである。（「雲陽秘事記」については、田中則雄 2011「雲陽秘事記と松江藩の人々」『松江市ふるさと文庫 13』に詳しい）

さて、萬寿寺での絵画調査をきっかけに、本堂・書院を飾る釘隠、古記録、建物の調査へとテンポよく展開した。萬寿寺本堂内で「伝三之丸御広間釘隠」（松江歴史館蔵）と同等品（同じ意匠で作成された製品）の釘隠 36 個が確認できたことは、堀尾氏に関する史料が極めて少ない中で、松江城研究を進めるうえでも驚くべき新発見である。

しかし、この間の萬寿寺での調査によって、新たな疑問とともに期待も生じてきた。

1. 何故、萬寿寺本堂内は「伝三之丸御広間釘隠」と同等品（同じ意匠で作成された製品）と考えられる夥しい数の「六目結紋」の釘隠で飾られているのか？
2. 萬寿寺本堂再建の部材として、明治 8 年（1875）に撤去された三之丸御殿が利用された可能性があるのではないか？
3. 「右向き替り揚羽蝶紋」の釘隠で飾られた萬寿寺書院は、再建にあたり明治初年に神谷家の屋敷を移築した可能性があるのではないか？
4. 萬寿寺の茶室は、『松江の茶室』（岡田孝男 1968）に記された、「旧藩士」「奥谷町」「不昧公の野遊の折、立ち寄られた」、という言葉から、松江藩家老職を勤めた乙部家下（中）屋敷からの移築した可能性があるのではないか？

5. 幕末から明治初年にかけての萬寿寺の伽藍復興にあたり、松江城下の建物が移築（部材の転用を含む）されたとすれば、同様の事例が松江市内には他にもあるのではないか？

などであるが、今のところ結論を出すことはできていない。

隔靴掻痒（かっかそうよう）の感はありつつ、関係者が連携しながら垣間見た、松江の歴史の奥深さを語る一つの事例として、発見に至る経緯と新たな疑問、今後への期待を記したところである。本稿を執筆した現時点でも、萬寿寺での諸調査は継続しており、今後の更なる発見に期待したい。

最後に、調査に快くご協力いただいた萬寿寺ご住職古賀泰然道様、役員の皆様には心より感謝申し上げます。

追記

（令和 5 年 1 月 19 日追記）

その後も萬寿寺堂内と関連諸史料の調査が大矢幸雄先生らにより進んだが、今現在も現在の本堂、書院等の建立経緯や「六目結の釘隠」などの存在に関する決定的な情報を確認することはできていない。

そのような中で、2023 年 1 月 18 日、金工研究の第一人者で、京都国立博物館名誉館員、叡山学院教授、天台宗窓安寺住職である久保智康先生に萬寿寺においでいただき、萬寿寺の本堂、書院、釘隠を実見していただいた。「六目結の釘隠」についての久保先生の説明は次のようなものだった。

- 「名古屋城御殿、石清水八幡宮等これまで多くの金工の調査を行い見てきたが、松江歴史館に所蔵される『六目結紋釘隠』は 17 世紀前半、寛永期・堀尾氏の最末（寛永 10 年/1633）までに作成されたもので、ほぼ間違いなく京都で作られている。唐草の文様

（線の具合・タッチなど)、魚々子（ななこ）がものすごく細かいことなど、寛永期の特徴がよく分かる。模様も彫金のタッチも間違いなく寛永期のもので、極端な話、名古屋城御殿の金具を作った工人（躰阿弥の可能性）と同じなのかもしれない。経験的に 17 世紀前半の金工は市の指定文化財レベルで、歴史館蔵『六目結紋釘隠』は絶対市指定レベル。これと同じものが萬寿寺本堂には 36 枚もある。観察する限り、線彫りに若干の違いはあるが、唐草の形の特徴は同じで、工人の違いがあると思われる。私がこれまで見てきた中で、これほど個性のあるデザインが寛永の段階に作られていたのは驚き。寛永期にはまだご公儀に遠慮するなかで、見るからに「堀尾」という自己主張をオリジナルで行っている例を他には知らず、新鮮な驚き。」

- 「萬寿寺の『六目結紋釘隠』が寛永期なのは間違いないので、ひょっとしたら三之丸御殿のものが金具以外にあるのかもしれないと期待していたが、残念ながらその予想は外れていた。この『六目結紋釘隠』の意味は、松江城の歴史の上で、本来打ち付けられていたであろう三之丸御殿の建築年代をはっきりと示す物証。意匠は武家好みで、御殿建築を飾るのにふさわしい。」

久保先生の現地調査とご説明を通し、松江歴史館蔵、萬寿寺本堂の「六目結紋釘隠」は、金工の専門的見地からも寛永期の貴重で丁寧な作品であること、デザイン的にも御殿建築を飾るのにふさわしものと確信できた。久保先生からは移動の車中でもお話を伺い、「六目結紋釘隠」の調査報告を『松江城研究』にご執筆いただくこともご快諾を頂いた。感謝。